熊野神社跡と古瓦

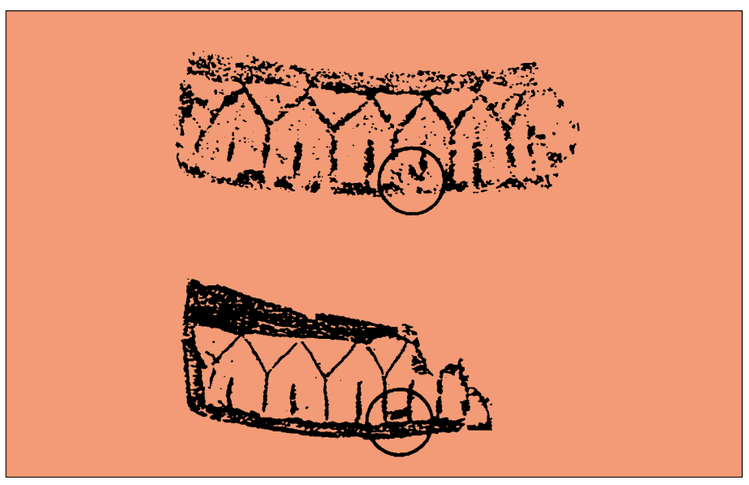
小さな平場の上にのる石の祠は熊野神社の跡です。かつてあった神社は大正３年（1914）に日枝神社（北へ350m地点）に合祀されました。この熊野神社は、江戸時代に幕府より三代将軍以下代々の御朱印状が下され五石六斗の社領を得ていました。また、神社管理には麓の天台宗大福寺が別当として当たっていました。元々、熊野信仰は、平安時代後期から中世にかけて天台系の修験者の活動の中で各地に広まっていきました。当所の熊野神社と別当大福寺の関係も矛盾のないもので、そもそも中世は神仏混淆の世界であり、両者は中世において一体と見なして良いのでしょう。

さて小倉城跡の山麓に位置する大福寺付近では、昭和初期に下図のような剣頭文（けんとうもん）と呼ばれる文様を付けた軒先を飾る古瓦が採集されています。この瓦は、鎌倉時代後半に比企地域を中心に一部都下多摩川中上流域にも分布した「比企型」と呼ばれる中世瓦に該当します。そして「比企型」中世瓦は神社建築の屋根を飾るものであることが近年の研究により分かってきています。よって、この古瓦もお寺の屋根を飾ったものではなく、熊野神社の屋根を飾っていたものと推測されます。この資料で特に注目されることは、かつての武蔵国の政治・文化の中心であった国府に隣接する武蔵惣社六所宮（現大國魂神社）の跡地から出土した古瓦と同じ笵型で製作されたものであることです。このような瓦資料の関係を同笵瓦とか同笵関係と呼びますが、同笵瓦は製作相互の同時性や前後関係そして双方の製作事情のより具体的な関係を炙り出す大切な資料になることが知られています。

六所宮を中核とする武蔵国府地域では古代末期から中世前半にかけて天台宗系のネットワークが張り巡らされていたことが知られています。また、小倉地域を含む都幾川・槻川流域でも慈光寺や平沢寺を頂点に天台宗系の寺社が数多く中世に存在したことが知られています。具体的には、武蔵国府周辺と比企地域の複数地点で比企型中世瓦とその同笵関係が確認されることから、双方で天台宗を中心とする宗教ネットワークが構築され、ヒトとモノの交流が行われた可能性が想定できそうです。

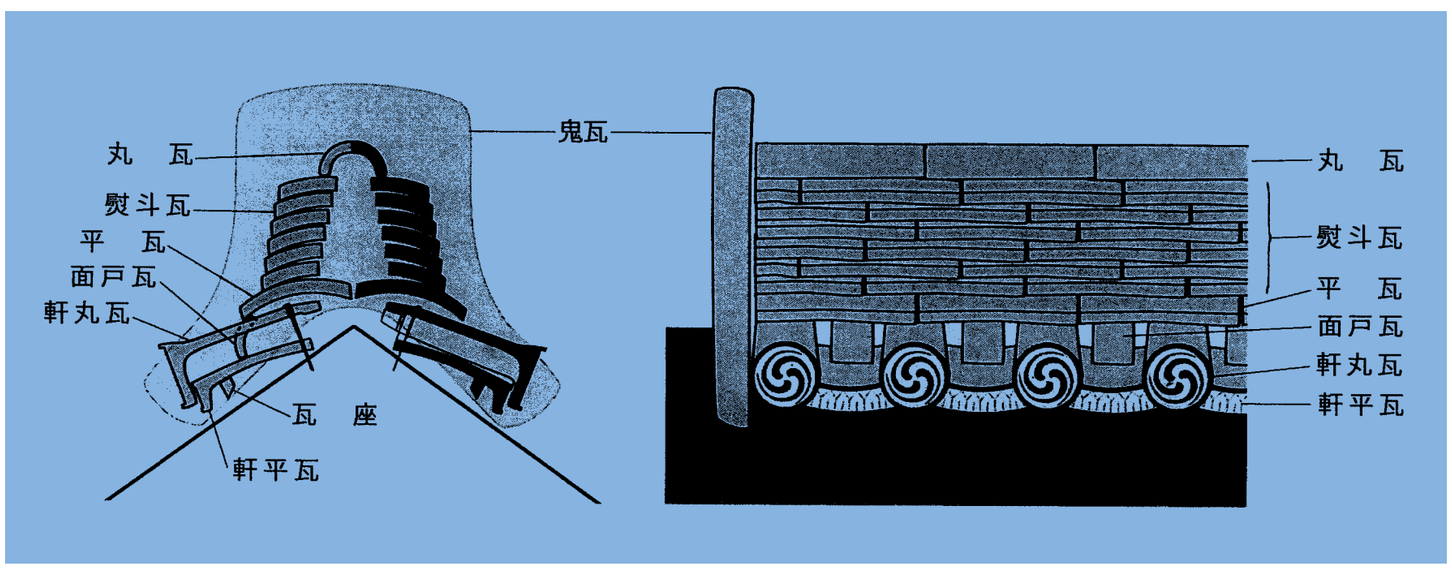
この地点は、小倉城成立前史の一端を示す大切な場と言えるかも知れません。

（ときがわ町教育委委員会）



大福寺（上）と六所宮（下）（※丸印　笵傷）

▲ 大福寺と六所宮同笵瓦



▲ 大棟に葺かれる中世瓦想定図『武州二宮神社と古代・中世の瓦』より